地中深くに眠る石器から歴史に思いを馳せるロマン。

feel TEIKYO

あなたにつながる帝京大学　撮影・今城 純

朝から夕方まで無心に土を掘り、それをふるいに掛ける作業。ここは新潟県関川村にある荒川台遺跡。帝京大学文学部史学科による、2年に一度の考古学実習が行われています。調査対象は旧石器時代。のべ2週間にわたる合宿生活で、学生たちは同じ釜の飯を食べながら、発掘現場で身体を動かし続けます。机に向かっての授業が多い文系学科のなかで、このようなフィールドワークは貴重な体験。学生たちにとっても大変有意義なものだと担当の阿部朝衛先生は話します。「将来は学芸員や文化財保護の仕事に就きたいという学生が多いので、このような現場での身体記憶はきっと生きてきます。実習後の授業では、学生同士や私たちとの距離感が縮まって討論が活発になり、また文献を読んだときの理解度も深まるなど、効果は大いにありますね」。今年で13回目となる荒川台遺跡発掘調査の目的は、大きく3つに分けられるそう。ひとつめは、これまでの常識では異なる時代のものと考えられていた石刃と細石刃が、この遺跡で同時に出土したということから新たな歴史認識を導き出すこと。次に、他の土地では見かけない独自の石器作りの技法を「荒川台技法」と命名し、文化圏として成立させること。最後に、出土状況から当時の生活形態を復元すること。「遺跡を掘っていくと、石器がドーナツ状に分布していることがわかってきました。それによって当時の集落の様子を想像することができます。また、ここで出土した黒曜石の石器を調べると、長野県和田峠や秋田県男鹿半島の黒曜石と化学組成が一致することが確認されました。そこから、原料となった黒曜石を当時の人が移動して取りに行ったか、物々交換で届けられたという仮説が生まれます。研究を通して、旧石器時代に生きた人々のことをどんどん具体的にイメージしていく。そこにロマンを感じますね」と阿部先生。予測をしていたものはもちろん、予測しなかったものが出土したときの喜びはひとしお。ひたすら掘っても空振りということも多いそう。それでも、この実習以外にもボランティアで何度も発掘調査に参加しているという大学2年生の林 賢史さんは「掘っている瞬間瞬間が楽しい。何も出ないことを予測し検証するのも、考古学的に意味のあることなので無駄ではありません」と話してくれました。私たちの普段の生活ではあまり意識しない地中のことについて、ときには思いを馳せてみてはいかがでしょう。

TEIKYO

帝京大学 本部広報課
TEL.03-3964-4162
〒173-8605 東京都板橋区加賀2-11-1

帝京大学をもっと感じるマガジンをお届けします

帝京大学のあれこれを充実のコンテンツで紹介する冊子『feel TEIKYO』を配布中。
冊子請求先→ ✉ post@med.teikyo-u.ac.jp（本部 広報課）
スペシャルサイト→ www.feelteikyo.com